

氏名	張 允禎
授与した学位	博 士
専攻分野の名称	文 学
学位授与番号	博甲第2497号
学位授与の日付	平成15年 3月25日
学位授与の要件	文化科学研究科人間社会文化学専攻 (学位規則第4条第1項該当)
学位論文題目	古代馬具からみた東アジアの社会
学位論文審査委員	主査・教授 新納 泉 教授 稲田 孝司 教授 久野 修義 助教授 松木 武彦

学位論文内容の要旨

本論文は、韓半島三国時代および日本列島古墳時代の馬具について、細部の構造の詳細な分析から、それぞれの地域における変遷と分布の地域性を検討し、両地域の関係と特色を論じたものである。A4判 188 頁におよび、詳細な資料一覧と各資料にかかわる参考文献を含んでいる。一部は韓国語および日本語の既発表論文に手を加えたものであるが、多くは新たに書きおこしている。

第1章 東アジアにおける馬具研究の歩み

韓半島と日本列島における馬具の考古学的研究史を整理し、韓半島では三国の区分にとらわれない考古資料独自の地域性の検討が十分に進められていない状況を指摘した。そこで韓半島における考古資料独自の地域性の検討を行い、日本列島における地域性とのかわりを分析すれば、韓半島と日本列島の複雑な地域間の関係を論じうる可能性があることを示し、本論文で行おうとする研究の方法について説明した。

第2章 日・韓両地域の鐙の展開と地域間交流

本章では、乗馬においてきわめて重要な役割を果たす鐙（あぶみ）を取り上げた。

第1節では、韓半島の鐙について、木心鐙については足をのせる踏受部の形状や、全体の外装鉄板の形態を中心に、鉄製鐙についても踏受部の形状と柄部の形態から型式分類を行い、それに基づいて変遷過程と地域色の検討を行った。その結果、4世紀から5世紀前葉には韓半島全体でほぼ斉一的であった鐙が、5世紀中葉になると洛東江をはさみ東と西で地域色をみせるようになり、6世紀にはそれがますます顕著になることを明らかにした。また、慶州をはじめとする洛東江以東では鐙の補強部材として鉄を多用して強度を高めるのに対し、洛東江以西では構造的な形態の改良により鐙の強度を高めるという志向性の違いを伴っていることを明らかにした。

第2節では、日本列島の鐙について検討を加え、韓半島と同じような視点で変遷過程と地域色の検討を行い、鉄による補強や形態の改良よりも、木心鐙の骨組となる木部の強化という方向性が、列島の鐙の大きな特質であることを指摘した。しかし、列島内においても地域色があり、上記のような方向性をもつものは近畿とその周辺地域に分布し、北部九州や東日本では鉄を多用するものも含めた韓半島の製品を輸入する例がみられると推測した。そこから、鐙の生産や入手・交換において近畿地方が常に中心となっていたとはいえず、他の地域が独自に韓半島との関係を築いていたと思われ、これまでの近畿中心的な古墳時代像のとらえ方に再考を迫る材料となると考えた。

第3章 轡からみた日・韓両地域の馬具の特質

本章では、馬を御するうえで最も重要な部分である轡を取り上げた。

第1節では、轡を構成する部品のうち、馬の口の両脇に当てる部品である鏡板と、鏡板が面繫につながる部分である立聞（たちぎき）の形状に着目して、韓半島における轡の型式分類をもとに、地域色の分析を行った。とくに金属や有機質の棒状の部品を用いる轡（はみえだぐつわ、ひょうぐつわ）を中心に、立聞に大きく3種類の系列があることを重視し、変遷と分布を検討した。その結果、高句麗・百済・新羅および伽耶諸勢力の相互の緊張が高まる5世紀中葉から6世紀にかけて、各地域の轡の様相が異なってきており、こうした社会的激動にかかわる軍事的・社会的環境に応じて、馬具の位置づけが変動していることを推測している。

第2節では、轡を構成する部品のうち、引手と銜の組合せを中心とする轡の全体的な構造に着目して、韓半島・日本列島両地域での展開過程と地域色とを検討した。引手は手綱につながる金具であり、2本の鉄棒を用いる複条引手と、1本の鉄棒による単条引手とがある。また、馬が直接くわえる部分である銜には、ねじりをもつものとそうでないものがある。そうした要素の組合せの変遷や地域色を検討した結果、韓半島・日本列島両地域でほぼ連動した変化をみせることが明らかになった。しかし、日本列島には旧式の様相が残るなどの地域的特質がみられることや、近畿地域に対し北部九州・東日本などの地域では異なった傾向が認められることもわかった。また、日本列島においては、轡は、出土した地域の社会的・政治的な環境を反映するというより、出土した墓の被葬者の性格あるいは職掌を表わす可能性があると考えた。

第3節では、轡を中心に、西アジアや中央アジアから東アジアに至る馬具の展開過程を概観し、韓半島や日本列島の馬具の位置づけを大局的に捉えようと試みた。鏡板の形状や鏡板と銜を結合する方式にはさまざまな違いがあり系譜の違いを示しているが、それが中国、韓半島、日本列島でどのような関係にあるかを検討することにより、馬具や騎馬文化の伝播過程を追求し、前節までの分析結果が示す意味を別の角度から論じた。

第4章 韓日騎馬文化の展開と政治社会の形成

本章では、上記の鏡と轡に関する検討をもとに、墳墓への副葬状況やその他の副葬品の特徴なども考慮に入れながら、韓半島と日本列島の各地域における馬具と騎馬文化の特質について整理した。西アジアで生まれた馬具が中国に伝わり、韓半島各地域を経て日本列島に流入するが、受容した地域の社会状況や特質に応じて、その社会的な意味は一様ではなかったと考えた。

韓半島においては、高句麗やそれに対立する百済地域などでは馬具が実戦的に使用されたと想定されるが、伽耶連合が成立する南部では交易品としての威信財的色彩が強く、慶州を中心とする新羅地域では階層的身分の象徴として意味をもっていたと思われる。

一方、日本列島では、近畿や、北部九州、関東などの諸地域で、馬具に対する意識や取り扱いが異なっていた可能性があり、韓半島のどの地域と交流をもっていたかという違いが馬具の取り扱い方に反映しているのではないかと推定した。また、以上のような作業と考察を通じ、東アジアの馬具技術と騎馬文化がそれぞれの地域の社会発展や国家の形成において重要な役割を果たしていたと考えた。

学位論文審査結果の要旨

2002年12月19日、学内審査委員4名によって学位審査会を行った。審査会には審査委員の他に約20名の参加があった。審査の結果は以下の通りである。

本論文は、馬具の展開と地域性について、韓半島と日本列島の両地域を通じて検討したものであり、馬具の型式の詳細な検討に基づき、きわめて多くの資料を分析して、両地域の複雑な関係を明らかにしており、馬具研究はもとより、古墳時代資料の地域性研究および日韓交流史研究のいずれの分野においても、研究の発展に大きく寄与する内容であると評価できる。

これまで、日本の研究者が韓国の馬具を研究することはあったが、韓国の研究者の視点から韓国の資料をふまえて日本列島の馬具を検討した例はきわめて乏しく、その点で新しい視点を提供することになった。また、従来の韓国における馬具の地域性研究は、高句麗、新羅、百濟、加耶などの政治的領域を自明の前提として議論されることが多かったが、本研究ではあくまでも考古資料によって地域的研究を組み立てようとしたことが新しい試みである。

資料の検討においても、発掘調査報告書に基づく分析にとどまらず、報告書では十分に理解できない詳細な構造について、実資料を調査することによって検討を進めるなど、意欲的な姿勢が認められる。

論文の構成については、鐙と轡という最も基本的な馬具の詳細な型式分類と分布の検討から韓半島と日本列島の関係を論じるという論旨の展開が明確であり、それを東アジア全域の流れのなかに位置づけるという作業も行われている。必要な図も添付され、本来は難解な資料の分析を、わかりやすく論じている。

審査においては、以上のような点が高く評価されたが、日本列島内の馬具の分布について、さらに詳細な検討が可能であり、本論文における日本列島内の地域性の評価が、まだ必ずしも十分な資料の裏付けをもっているとはいえないという指摘もあった。また、こうした馬具研究からどのような歴史叙述を行っていくのかという点にも質問が向けられた。

その他、馬具の細部についての評価や用語などについても審査委員から質問があり、審査委員相互の間でも議論がなされ、さまざまな今後の課題は指摘されたが、母国語ではない日本語の報告書を十分に活用していることや、実資料の閲覧にかかわる困難性を乗り越えて上記のような成果を上げた点にも高い評価が寄せられ、さまざまな課題も全体として本論文の成果を損なうものではないことが確認された。

審査委員会は、以上のような審査の経過から、本論文を博士の学位論文として認定することにつき、全員一致で合意した。